

銭湯的都市空間

～様々な人が活動をし、その空間に居合わせる建築～

正会員 ○加藤真璃子

日本女子大学宮研究室

1. 研究の背景と目的

私は外が好きだ。季節の変わり目のおいやレストランの厨房の音、赤ちゃんの視線や子供と目が合った時の会釈…。外には人の出会いや環境の出会いがあるからだ。

しかし、近頃、特に東京の都市部において、そのような偶発的な人や環境の出会いをシャットアウトして過ごしている人が多いように感じている。都市を歩いていると、せわしなく動く交通や都市開発など雑念に溢れている。そんな雑念から逃れるために領域を制限できる膜に包まれるようになった。特に都市では皆スマートフォンを見ており物理的空間ではなくソーシャルネットワーク空間につながっている。その理由として情報を選択し自分で空間を制御できるからである。つまり、パーソナルスペースの強化が行われていると言えるのではないだろうか。自らの膜に包まれることで都市の雑念を除くことができるが、それと同時に外の偶発的な出会いも除かれるようになった。(図1)

私は、都市での過ごし方としてこのままでよいのかと疑問に思う。自分を開放しちょっとした出会いが得られるような都市の中での居場所をつくり、周りに関心を持ちながら空間を共にすることはできないだろうか。

物理的空間を通して会話がなかったとしても様々な人と居合わせることで、その建築だからこそ感じられる偶発的なコミュニティをつくりたい。

今日、都市において強い膜に包まれながら過ごす理由として、均一な空間が並べられただけの、例えば、オフィスビルであれば仕事をするためだけの空間、商業ビルであれば物の売り買いためだけの空間になっているからだと考えた。経済的効果を目論んで建てられていても、最終的に残るのは人である。人に環境に還元したビルをつくるのが大切である。また、比較的多くの人が利用する商業ビルで人に環境に還元することが大事であると考えた。

2. 乳化(銭湯)

2016年建築学会賞を受賞し、毎年150万人もの利用者がある武蔵野プレイスに着目した。武蔵野プレイスは、これまで公共施設と無縁だった人たちを引き付けていくために、建築の力によって、全世代参画性、つまりは「公共性」を立ち現せようと設計している。設計手法は比較的小さな幾つもの空間が互いに反復・転移し合う形式をとることで、次々と空間に飲み込まれ続けることによって、空間の共鳴・共振のような状態を kw+hg architects 代表 比嘉武彦氏は「乳化」と呼んでおり、そういう空間体験が人のアクティビティに影響を与えていくと述べている。

私はこの「乳化」を「銭湯化」と定義する。銭湯では様々な人が集まり交流する空間である。また、湯気が充満することでバラバラなことをしているにもかかわらず、ある共有感が得られたり、フロントにいても漏れだす湯気の香りをかぐことで直近の記憶とあいまって、その場に居なくても人と空間を共にすることができる。(図2)つまり、「銭湯的建築」とは多種多様な人が様々な活動を行っており、そこに

Urban Space like Public Bath

-It happens to meet various spaces.-

Mariko Kato

Japan Women's University Miya's Office

居合わせることで、その空間が共鳴する建築である。



図1: 膜に包まれた私たち

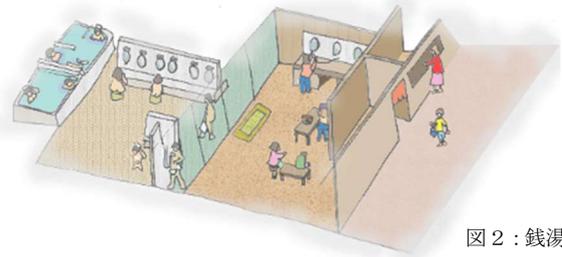


図2: 銭湯空間

3. ソーシャルネットワークによる物理的空間の希薄化

京都大学総長である山極氏によると、ソーシャルネットワークでのコミュニケーションはとっているようにみえて、実はそれは本来のヒトのコミュニケーションではないと述べている。ゴリラは顔と顔を突き付けてコミュニケーションをとり集団をつくる。それに対して、ヒトはある場所に居合わせ、他人の活動を通して他人に共感同情する能力が優れている。ヒトは他者の差異を認め様々なコミュニティを渡り歩ける特徴がある。しかし、ソーシャルネットワークのコミュニケーションは画面に顔を映してコミュニケーションを取っている。ヒトはゴリラ化になっているのではないか。人は本来、物理的な空間を通してコミュニケーションできる動物である。

ソーシャルネットワークは人とつながっているようにみえて、それは今いる自分のネットワークしか見えておらず他のネットワークの繋がりが見えにくい。

このような現代社会だからこそ物理的な空間を介することが大事になってくる。血縁関係に関係なくその建築で偶然居合わせることで偶発的なコミュニティができる空間が必要になっていくと考える。

4. 敷地

東京都豊島区西池袋1丁目



図2: 敷地周辺地図



図3: 敷地内の都市計画

所在地：東京都豊島区西池袋1丁目
 主な用途：商業施設
 敷地面積：2500m²
 延床面積：6050m²+40F分
 キーワード：パーソナルスペース・ 偶発的コミュニケーション
 銭湯

Location: 1-chome Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo
 Main Use: Commercial facility
 Site Area: 2500m²
 Total Floor Area: 6050m²+40F分
 Keywords: Personal Space/ Accidental Communication /
 Public Bath

4-2.都市開発

池袋駅周辺地域は、昭和 33 (1958) 年の首都圏整備計画で東京の副都心の一つとして位置づけられて以来、豊島区では池袋副都心を「文化と活力、みどりにあふれ新たなチャレンジの舞台となる『まち』池袋」を掲げ、都市づくりに取り組んできた。西池袋では「つながる池袋西口公園」には様々な人がいる。噴水で遊ぶ子ども、喫煙所でたむろするサラリーマン、ギターやアカペラを練習する学生、カップ酒や将棋をするホームレス、ただ通る人など。また、池袋西口公園では、よくイベントも行われており、外から来る人たちにぎわう。イベントが行われている際もホームレスが木の幹で活動しており、共存できている。その理由として象徴的な芸術劇場と開放的な広場があることで許容空間がつくられているからであると考えられる。しかし、この場所に高層ビルが建つことで芸術劇場と広場の関係が変わると考える。



図4：ふるまいの調査

まち」をコンセプトに駅前開発及び高層ビル三棟建つ予定である。

用途は、豊島区に問い合わせたところ、駅側の高層棟①、②は約三十階建て、高層棟③は三十階～五十階建てになる予定であり高層棟③は低層部が商業、その上にはオフィス、ホテルが入る予定とのこと。

4-3 池袋西口公園

5. 設計

5-1 プログラム

敷地周辺の広場と芸術劇場との関係を読み取りつつ、都市開発における高層棟③の銭湯的空間をもった低層部を設計する。

5-2 設計とまとめ

ひとつひとつの楕円のエッジにはスロープがめぐり、移動に伴い変化するシーケンス、そこを歩く人々は山道ですれ違う人同士のような視線の交差が生まれ、パーソナルスペースの膜がはじける。ぶどうの房のように配置されたスペースはそれぞれに見る見られる関係が作られる。(図5)

銭湯空間が都市スケールへのとび、私たちは目に見えない空気に浸かる。

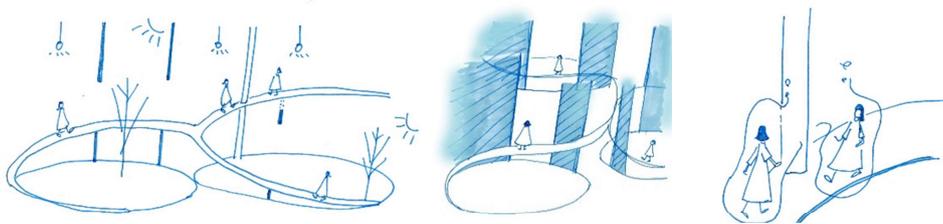


図5：変化するシーケンス (左)
 見る見られる (中)
 袖振り合うも他生の縁 (右)

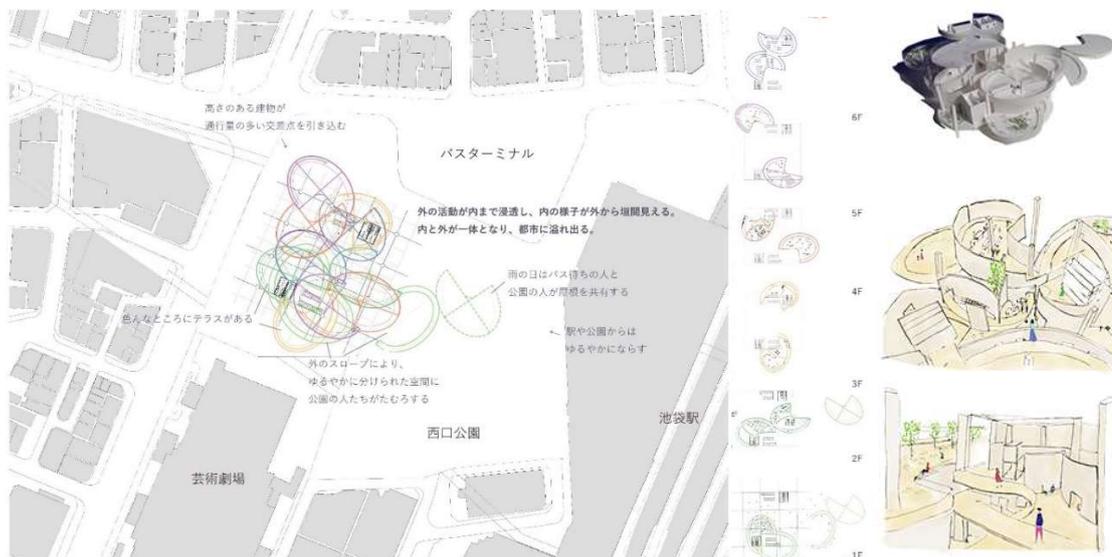


図6：配置図(左)
 平面図(中)
 パース